



平谷 美樹さん

1960年久慈市生まれ。大阪芸術大学卒。

99年作家デビューし、2000年に第一回小松左京賞を受賞。07年まで岩手県の中学校教師。

14年に「風の王国」で歴史時代小説作家クラブ賞を受賞。

代表作に「義経になった男」「風の王国」（角川春樹事務所）など多数。



新連載

「鳥海物語」

広報かねがさき10月号から全6回にわたり、町内在住の小説家 平谷美樹さん(55)＝一の台＝から寄稿していただいた「鳥海物語」を掲載します。

この話は国指定史跡鳥海柵跡から見た歴史をつづった物語で、広報かねがさきへ掲載するために書き下ろされたものです。

鳥海物語

1

(全6回)

—序章—

わたしは胆沢川と北上川の合流近くにある段丘である。

人間たちがわたしを(トリノミ)あるいは(トノミ)と名付けたのはいつの頃だったろうか。(トリノミ)は(鳥海)と書くが、川が合流する所を差す言葉であるとか、地形が鳥に見えるとか諸説あるが、はっきりしたことは分からない。

わたしの上には多くの人々が住み、去っていった。

大きな墓——古墳が作られたこともあった。

この国の中央から多くの兵たちが押し寄せ、胆沢川の南に城を築いた後、この辺りは騒がしくなったが、城が使われなくなると共に人も去っていった。

それからしばらくして、わたしの上に要塞が築かれた。それは、鳥海柵と呼ばれた。

戦がわたしの上を通り過ぎ、鳥海柵を造った一族は滅んだ。

一族の滅亡後、わたしの上に弔いの塚が造られた——。

以後、わたしの上には家が建ち、田畑が耕された。長い長い年月の間には、工場や中学校があった一時期もあった。

現在、わたしの上には田圃(たんぼ)があつて、夏は青々とした、秋には黄金色の稲が風に揺れている。冬には白い雪に覆われ、春には桜並木が美しい花を咲かせる。

今年の春には、花見が行われて、久しぶりに賑やかな気分浸った。どうやら、近頃わたしは、国の重要な遺跡の一つとされたらしく、そのこともあつての花見であつたらしい。

賑やかになることは喜ばしいが、わたしの上に咲くのは、梅の花が相応しいと思うのだが、いかがだろうか？

ああ——。その故事を知らない者たちも多からう。

ならば、この機会にわたしの見聞きしてきた歴史をぼつりぼつりと物語ろうか。



国指定史跡鳥海柵跡